

横手の伝統的なスノードーム、かまぐらの豊かな歴史

秋田県では、少なくとも 400 年以上前からかまぐらと呼ばれる雪の建造物が作られてきた。しかし、現在のような丸みを帯びたドーム型のものではなかった。江戸時代（1603-1867）の初期の秋田市のかまぐらの記録には、旗を飾った四角い屋根のないものもあり、一方で横手市の記録には、現在の秋田県で一般的に見られるドーム型に近い形をした雪のかまぐらが記されている。かまぐらの形や用途は時代とともに変化してきたが、地域の伝統との結びつきは強いものがある。

初期のかまぐらの形

かまぐらに関する最古の記録は、武家の子供たちが旗や正月飾りを持って四囲の周りを走り回る様子を描いたものだ。武家の子供たちが旗や正月飾りを持って四囲の周りを走り回り、家内安全や五穀豊穡を祈願してお供え物をしたり歌を歌ったりしている。記録では、これらの建物を「雪城」や「雪壁」と呼んでいる。しかし、この雪の建造物の装飾や歌にかまぐらという言葉が使われていることから、かまぐらと呼ばれるようになった。横手でも、武士の子供たちは雪壁式のかまぐらを作った。一方、商人の子供たちは、街の井戸や川のそばに小さな雪洞を作って、水の神にお供え物をし、祈りを捧げた。19 世紀後半に武士の階級が廃止されると、かまぐらをめぐる習慣もほとんどなくなっていった。大正時代に入ると、かまぐら作りは水神信仰から離れ、子供たちが雪の中で遊んだり、中の小さな祭壇にお札や餅などのお供え物を集めたりする、主に子供のための儀式になっていった。

現代のかまぐら

近世以前のかまぐらは、建物の屋根に降った雪を積み上げて作るのが一般的であった。そのため、建物は小さく、完全なドーム型ではなかった。1959 年、市はドーム型のかまぐらを標準のものとして作成したが、次第に道に自動車の通行が増えてきたため、ミニサイズのかまぐらを作ることが奨励された。現在、雪祭りの大きなかまぐらは、専門職人によって作られている。職人は、約 20 トンの雪を集めて、高さ 3 メートル、壁の厚さ約 70 センチのかまぐらを作る。かまぐらの中には、水の神様をお供えするための祭壇や、筵、座布団、火鉢などがある。子供たちは火鉢で餅を焼いたり、甘酒を温めたりして、道行く人に「どうぞ中へ(ハイッテタンセ)」と声をかけてもてなす。